

氏名	井口 雄介 (イグチ ユウスケ)
学位の種類	博士 (造形)
学位記番号	博第 13 号
学位授与日	平成 25 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号該当
論文題目	仮設的作品における〈場〉の問題 ～屋外型インスタレーションにおける作品性～
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 伊藤 誠 副査 武蔵野美術大学 教授 高島 直之 副査 武蔵野美術大学 教授 田中 正之 副査 東京藝術大学 准教授 八谷 和彦

内 容 の 要 旨

1970 年代以降インスタレーション・アート (installation art) という言葉が頻繁に用いられるようになり、「絵画や彫刻」というような、あたかも一つの手法、ジャンルとして扱われているが、実際は明確な定義はなされていない。むしろ「彫刻」、「絵画」と一概に言えないもの全般を総称してインスタレーション・アートと呼ばれることもしばしばである。本論文ではインスタレーション・アートが「仮設的」であることに着目し、作品が仮設ということがどのような効果をもち合わせているかを研究したものである。仮設ゆえに作品は保存されることがないため、多くの作品は〈場〉と関わるものとなっている。そこでまずは〈場〉がどのようなものか、またどのように成立しているかを検証した。

〈場〉とアートの関わりとしてはサイト・スペシフィックという言葉がすでに存在し、多く使われているが、それでもインスタレーション・アートの定義には至っておらず、今回、〈場〉を論じていくうえで、建築学や現象学といったさまざまな視点から〈場〉の問題を検証した。

全体は三部からなり、第一部では人が作り出す「領域」という不確定で、視覚的に見えない〈場〉の形成に関して考察した。この章では建築的な視点から、環境によって変化する、個人が作り出す領域をあらゆる「閾」、周りのものから人が作り出す境界を「仮想境界面」として、それぞれがどのように生成、変化するかを論及した。そしてこれらの言葉をより芸術表現とつなげるため、現象学を用いて立証することを試みた。第二部では実際に存在している〈場〉に焦点をあて、「空間」と「場所」の違いは、人の「経験」によって変化するものと論じた。人は特質的な「経験」をすることで「空間」から「場所」という認識にかわるのである。経験と〈場〉をあつかった作品展開で外せないミニマリズム＝リテ

ラリズムに言及するため、マイケル・フリードの論文「芸術と客体性」(1968)の発表以降、作品と〈場〉がどのように変化していったかを検証した。第三部では美術館という作品のためにつくられた特殊な場所について考察した。美術館では展示が入れ替わるため、同じ〈場〉でも違った作品の経験がもたらされる。そのため、美術館自体は作品を見るための目的が存在する「場所」ではあっても、個人個人にとっての「場所」にはなりえにくい。美術館での〈場〉を扱った作品はどのようなものがあるか、またインスタレーション・アートを目的とした美術館は他とどのように違うかを具体的な作家を挙げ考察してきた。

全体にわたり、インスタレーション作品と〈場〉の関わりについて、鑑賞者の「経験」をもとに論じた。インスタレーション・アートとは仮設であるがゆえに鑑賞者の存在は必須であり、作品が「もの」として鑑賞者に持続した「経験」を与え続けられるものではない。インスタレーション・アートとは鑑賞者の中に「場所」というものを作ることが重要であるということ結論とした。

審査結果の要旨

インスタレーション・アートは、世界的にも戦後—現代の美術史にとってきわめて重要なものであるにもかかわらず学術的にはいまだ研究途上の領域であるが、本論文はその表現のあり方が、仮設的であることの重要性を論じたものである。本論は仮設的な作品の特質としての「場」の生成を「空間」から「場」に変容する視点で論じ、対極にある美術館等の展示空間と対比させ、仮設であるがゆえの作品性の重要さを論証したものとなっている。またこの主題に至る根拠となり、論文との呼応の関係を持つ本人自身の作品も補遺として制作ノートが提出されている。本論文と補遺の目次構成は以下の通りである。

本論文 目次

序章

第一部 視覚経験と〈仮想境界〉

1. 空間と身体

1-1 「仮想境界面」と「障りの感覚」

1-2 オーバースケールと「閼」

1-3 メルロ＝ポンティにおける視覚

2. 作品事例と視覚

2-1 「閼」「視覚」と作品

2-2 クリストの作品における視覚操作

第二部 生成される〈場〉の経験

1. 場所と経験

1-1 トポフィリアとしての〈場〉

1-2 「芸術と客体性」をめぐって

1-3 A・カプローのハプニング

2. 作品と生成される〈場〉

2-1 R・セラとパブリック

2-2 川俣正と〈場〉の歴史性

第三部 場所性なき〈場〉

1. 機能性としての場所

1-1 本棚と展示室

1-2 展示室における経験

2. 美術館における場所性

2-1 J・タレルと場所の普遍性

2-2 M・クリードの場所性

結び

補遺 制作ノート 自身の作品を通して

- Jeans Factory Art Award 2008/ 高知県
- 岡本太郎現代芸術賞展 / 神奈川県
- 神戸ビエンナーレ アート・イン・コンテナ展 / 兵庫県
- e-SCAPE 武蔵野美術大学 大学院修了制作
- Tokyo Midtown Art Award 2010/ 東京都
- MMM 第3回みなとメディアミュージアム / 茨城県
- 六本木アートナイト 2011/ 東京都
- 六甲ミーツ・アート 2012/ 兵庫県
- 博士課程研究制作 ETEMENANKI Project.BABELvol.0

第一部の「視覚経験と〈仮想境界〉」では、矢萩喜従郎の著書『空間 建築 身体』（エクスナレッジ、2004年）を論拠として、仮想境界面によって作られる「閾」と対峙する「閾」とのせめぎ合いによって、「見えない空間」の把握をすることについて論じられている。ここでは予想や経験を越えたスケールに対して、鑑賞者の「閾」が脅かされるように感じ、急激な「閾」の調整や再構築を求められる状況の中でそれが不全に陥り「オーバースケール」を感じるという例を挙げ、その触覚的経験を視覚との関係から浮き彫りにし、それが「経験」として作品性に現れることを具体的な作品事例を挙げて論じている。

第二部の「生成される〈場〉の経験」においては、第一部より「経験」の問題系を引き継ぎ、実際存在している〈場〉というものが経験によってどのように変化しているかについて論及している。「場への感情」という問題についてイー＝フー・トゥアンの提唱した〈トポフィリア〉という現象学的地理学の概念を用いて「空間」と「場所」の違いについて論じ、1960年前後から現代への歴史的推移をトレースし、具体的例題を挙げつつ、その仮設的作品が「空間」を「場所」に変換するところの「時間」や「歴史性」の経験と記憶の介在の

不可避性を論証していった。

第三部「場所性なき〈場〉」では第二部までに論じてきた、主に屋外型インスタレーションに見られる〈経験〉を生み出す場所性とは対極にある、機能としての〈場〉である美術館などの展示空間について、ヘンリー＝ペトロスキーの『本棚の歴史』（白水社、2004年。原著は1999年）を用いて視覚的な場所性として批判的に対比させ、仮設であるがゆえの作品性の重要さを論証したものとなっている。

なお制作において、作品としては井口が博士後期課程在学中に展示し、公聴会で発表した4点（Tokyo Midtown Art Award 2010、六甲ミーツ・アート 2012、ETEMENANKI Project.BABELvol.0、岡本太郎現代芸術賞展）を主に対象としたが、場所性に対する認識と追求の深さと綿密な計画性、作品性の根拠を先行事例の比較を念頭に置いての独自の展開、またその社会的な位置づけの的確さが確認された。

本論文の成果

本論文は、インスタレーション・アートという、学術的にはいまだ研究途上の領域であるが世界的にも戦後—現代の美術史にとってきわめて重要なものとしてあり、その未踏の領域に踏み込んだ考察は意義深い研究であると認められた。作品制作と論文の関係において、仮設性・スケール・場所の考察など、制作過程から優れた問題提起がなされ、それが論文の執筆に関係しつつ呼応するように展開されている点が評価された。

論文においては、絵画や彫刻の概念の延長線上で論じられる場合や、また否定的な見解としてある「演劇性」に関わるインスタレーションに対して、仮設的であることに焦点を当て、建築的な視点から見えない空間性についての定義を行い、「場への感情」という問題を浮き彫りにしている。また、空間から経験を通して場所に変化することを根拠とした〈場〉の重要性について具体例を示して検証し、仮設的であるがゆえの〈場〉を生成する作品性を論じるに至った筋道は新たな知見であり、評価された。

審査の要旨

本論文は、2012年7月に審査した予備論文に加筆訂正して提出されたものである。加えて、補遺として本論文に至る問題提起に関わる作品制作記録として、「制作ノート」が提出された。審査委員会は、井口雄介から提出された学位請求論文を検討し、2013年2月21日に公聴会を実施し、審査にあたっては予備論文で指摘された事項への対応を確認し、審議に入った。まず作品制作と論文の関係において、仮設性・スケール・「場」の考察など、制作過程から優れた問題提起がなされ、それが論文の執筆に関係しつつ展開されていることが評価された。制作においては、場所性に対する認識と追求の深さ、その綿密な計画性が評価された。また作品性の根拠を先行事例の比較を念頭に置いた独自の展開であり、それが優れた結果を生んだこと、またそれが社会的にも評価されたことも確認された。論文においては、まず予備論文で指摘された説明が不足していた箇所の補足、誤解を

招く事例を訂正し、文章もさらに推敲されたものになっていた。また公聴会の場においては、インスタレーションについて独自の解釈を求める質問があったが、これに対して全てのインスタレーションが「場」の生成に関わる訳ではなく、仮設的な作品ゆえにそれが問題となり作品性が生まれる、というのが本論の結論であることが再度確認された。

本人退出の後、審査委員会が厳正に討議した結果、本論文「仮設的作品における〈場〉の問題～屋外型インスタレーションにおける作品性～」は武蔵野美術大学 平成24年度博士後期課程学位申請論文として、学術研究ならびに制作研究に寄与する新しい知見に満ちた独自の考察であることを認め、博士（造形）の学位に相応しいとして、全員一致で合格の判定に至った。



a Tokyo Midtown Art Award2010
 “その先にあるもの”
 2010年 | 東京、六本木

b~f MMM みなとメディアミュージアム
 “CUBeSCAPE”
 2011年 | 茨城県、那珂湊市

g~j 六甲ミーツ・アート
 “CUBeSCAPE”
 2012年 | 兵庫県六甲山





k~n 博士課程研究発表展 “ETEMENANKI project.BABEL vol.0”
| 東京都小平市 武蔵野美術大学

o~q 第16回岡本太郎現代芸術賞展 “ETEMENANKI project.BABEL vol.0.5”
| 神奈川県川崎市 岡本太郎美術館

